

■名取洋之助 写真家。戦時下に報道写真の理念と方法を紹介、多くの俊才を育て、<敗戦>後に{岩波写真文庫}を遺した。

なとりようのすけ

韓国併合・・1910＝ 元慶応大学教授で実業家の名取和作の三男として東京に生まれた。母も実業家の娘。

明治天皇没・1912＝ 2歳：

ハ 勝江条約・1919＝ 9歳：

原敬首相暗殺1921＝11歳：

関東大震災・1923＝13歳：慶応義塾幼稚舎を卒業、普通部に進む。

共産党事件・1928＝18歳：慶応義塾普通部を5年で卒業。母とともに渡独、

世界恐慌・・1929＝19歳：現地の友人の勧めで、ミュンヘンの私立美術工芸学校に入学し、商業美術を学ぶ。

海軍軍縮条約1930＝20歳：中退して、友人の実家の手織物工場に勤める。工芸デザイナーのエルナと知り合い、結婚。母は帰国。

満州事変・・1931＝21歳：兄にライカを買って貰い、知人から手ほどきを受ける。エルナ撮影の写真が掲載され、ウルシュタイン社の契約カメラマンとなる。主としてグラフ週刊誌{ベルリナー・イラストリールテ・ツァイトゥング}に報道写真を発表。

五一五事件・1932＝22歳：同社特派員として一時帰国、日本の自然や文化を取材、

国際連盟脱退1933＝23歳：満州事変にも従軍、ヒトラー政権の外国人排除により、そのまま日本にとどまった。木村伊兵衛、伊奈信男らと{日本工房}を設立、来日したエルナも含め、展覧会などで、報道写真の啓蒙にあたる。

帝人疑獄事件1934＝24歳：内部対立で分裂するが、第2次{日本工房}として再建、海外向け日本宣伝雑誌{NIPPON}を発行、デザイナーの山名文夫、亀倉雄策、カメラマンの土門拳などのスタッフにより質の高い視覚的なグラフ雑誌となる。

芥川直木賞始1935＝25歳：国際文化振興会の委嘱で、五島列島など撮影旅行、その後も{NIPPON}の資金補填を受ける。

二二六事件・1936＝26歳：エルナとともに渡独、ベルリン・オリンピックの取材などを行う。

日中戦争始・1937＝27歳：*{LIFE}の表紙に「JAPANESE SOLDIERS」が採用される。写真集「GROSSES JAPAN」をベルリンで刊行。ニューヨーク近代美術館の写真展に、日本人として唯一展示される。

健保+総動員 1938＝28歳：国際文化振興会のドイツでの展示会の図録作成。{COMMERS JAPAN}創刊。対外宣伝誌の制作などに従う。

第二次大戦始1939＝29歳：引き続き、{日本工房}の現地組織などにより、満州、中国で対外宣伝誌の制作に従う。エルナを入籍。

大政翼賛会・1940＝30歳：東京に名取書店を設立、{支那文化談叢}などを出版。上海に本拠を移す。宣伝誌等の功で勲六等瑞宝章。

日米開戦・・1941＝31歳：上海で太平印刷出版公司を設立、「長江画刊」などを刊行。タイ語の{東亜画報}を創刊。

創価学会検挙1943＝33歳：上海に太平書局を開設、「李陵」「プロッホ木版画集」などを刊行。

年金+総武装 1944＝34歳：中国人向け宣撫耕作をする一方、残虐行為を見かね、日本軍向けポスター「焼くな・奪うな・殺すな」。

敗戦・・・1945＝35歳：南京で敗戦。膀胱膿腫のため手術。

新憲法公布・1946＝36歳：エルナと離婚。長女を出産した宮島玖と再婚。帰国。再手術。

新憲法施行・1947＝37歳：日本の{ライフ}を目指し、編集責任者として写真週刊誌の第1号{週刊サンニュース}を創刊したが、

三大事件・・1949＝39歳：売れ行き不振で休刊となる。

朝鮮戦争始・1950＝40歳：*編集・企画して{岩波写真文庫}が創刊され、「5:アメリカ人」「6:アメリカ」を担当、

独立回復・・1951＝41歳：

TV放送始・・1953＝43歳：{岩波写真文庫}が戦後第一回の菊池寛賞。

自衛隊発足・1954＝44歳：玖と協議離婚。日本写真協会より表彰される。第3次{日本工房}を設立。

55年体制始・1955＝45歳：「148:忘れられた島」。著書「フォト・ライブラリー3新しい写真術」、

国連加盟・・1956＝46歳：「フォト・ライブラリー7組写真の作り方」。{日本工房}から手を引く招かれて、訪中し、

なべ底不況・1957＝47歳：写真集「麦積山石窟」、「220:麦積山」「221:北京」「222:江南ほか」「223:四川ほか」「224:広州ほか」として刊行、写真展も開催。

美智子妃・・1959＝49歳：玖と再婚。286冊をもって{岩波写真文庫}が終了。渡欧、以後、ロマネスクに魅せられ再訪、

安保闘争・・1960＝50歳：

タイタイ病始・1961＝51歳：刊行開始の「世界美術大系」に多数収録される。

全国総合計画1962＝52歳：*写真集「ロマネスク」。戦後4回目の渡欧中、体調が悪化し、帰国後、胃癌のため没した。没後刊行の著書「写真の読みかた」は、編集者の立場から書かれたユニークな写真論である。